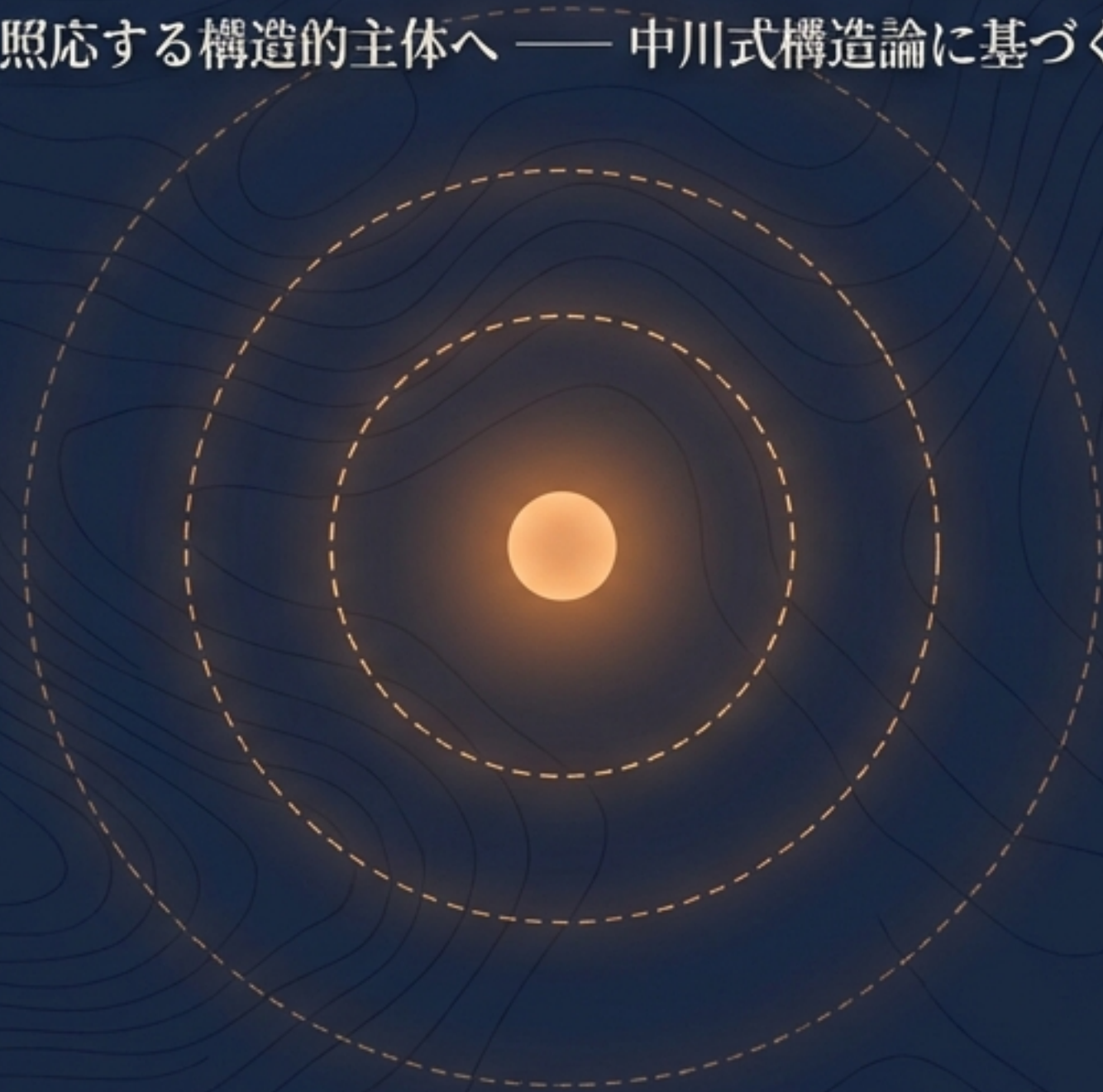
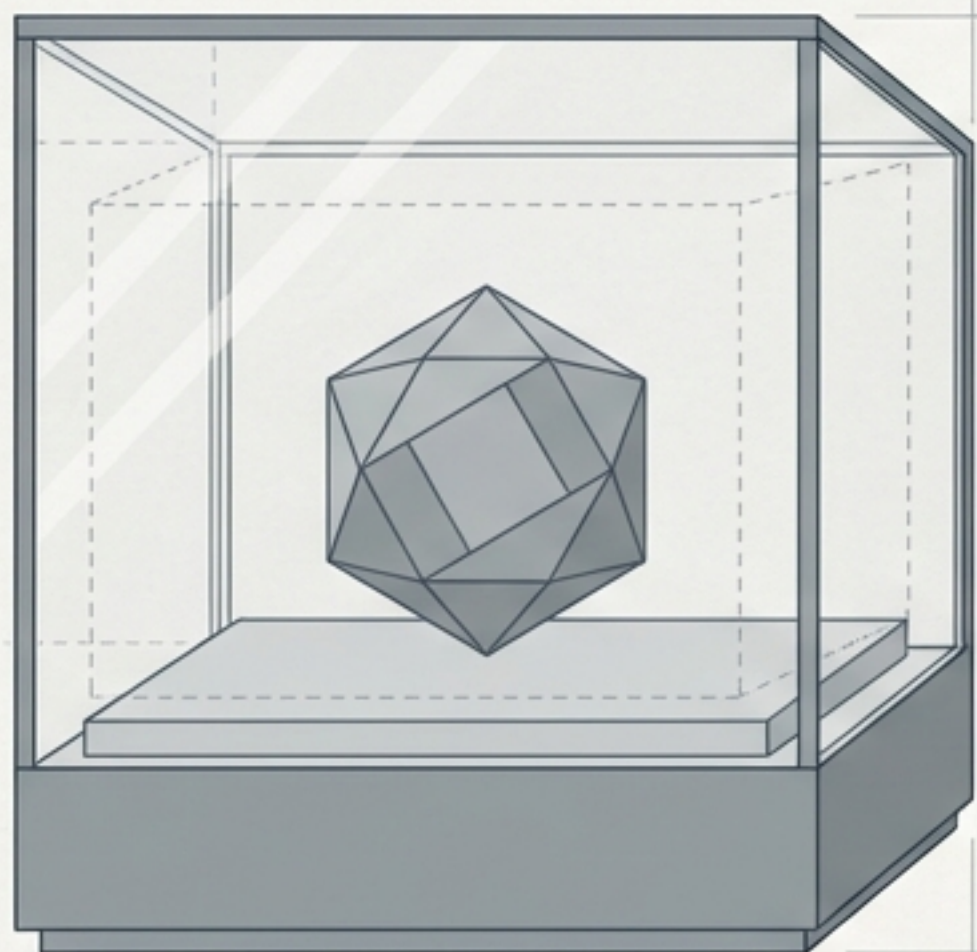


地域文化の回復力：多元世界における「閉鎖から開放」への接合

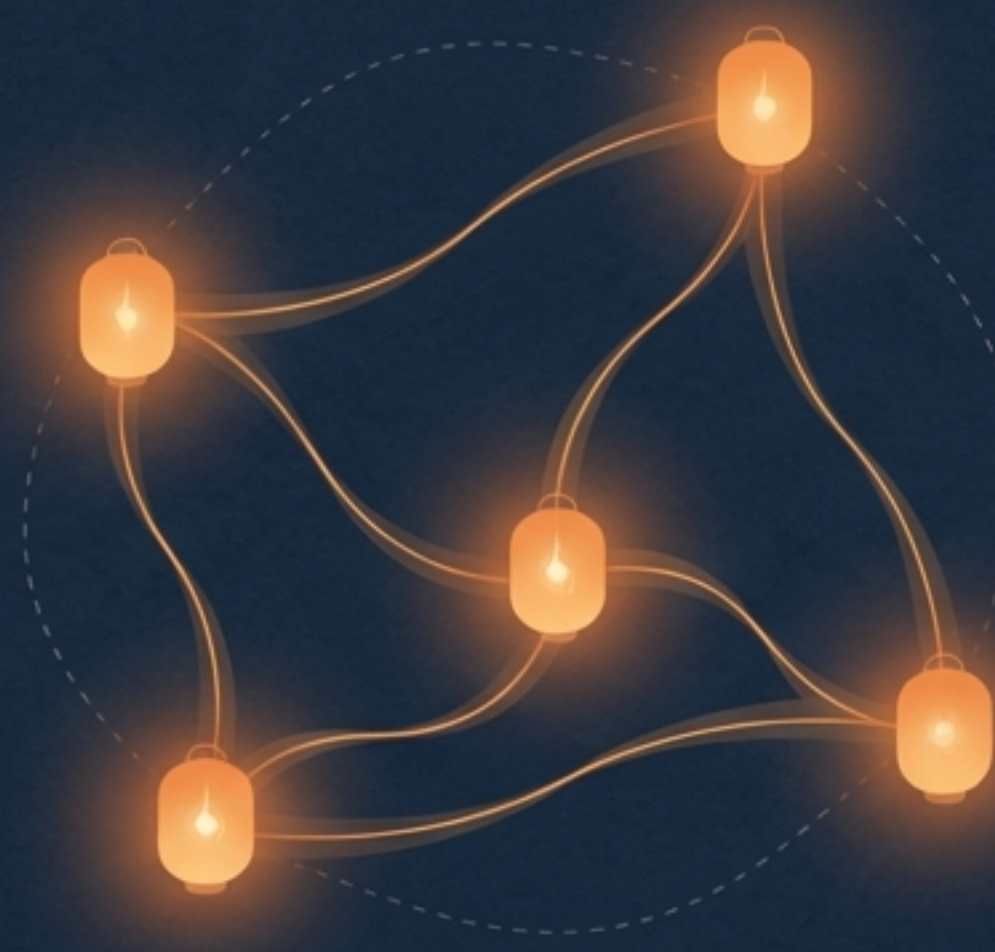
閉ざされた保存対象から、照応する構造的主体へ —— 中川式構造論に基づく文化再帰のアーキテクチャ



文化は「守るべき過去の遺物」ではない。



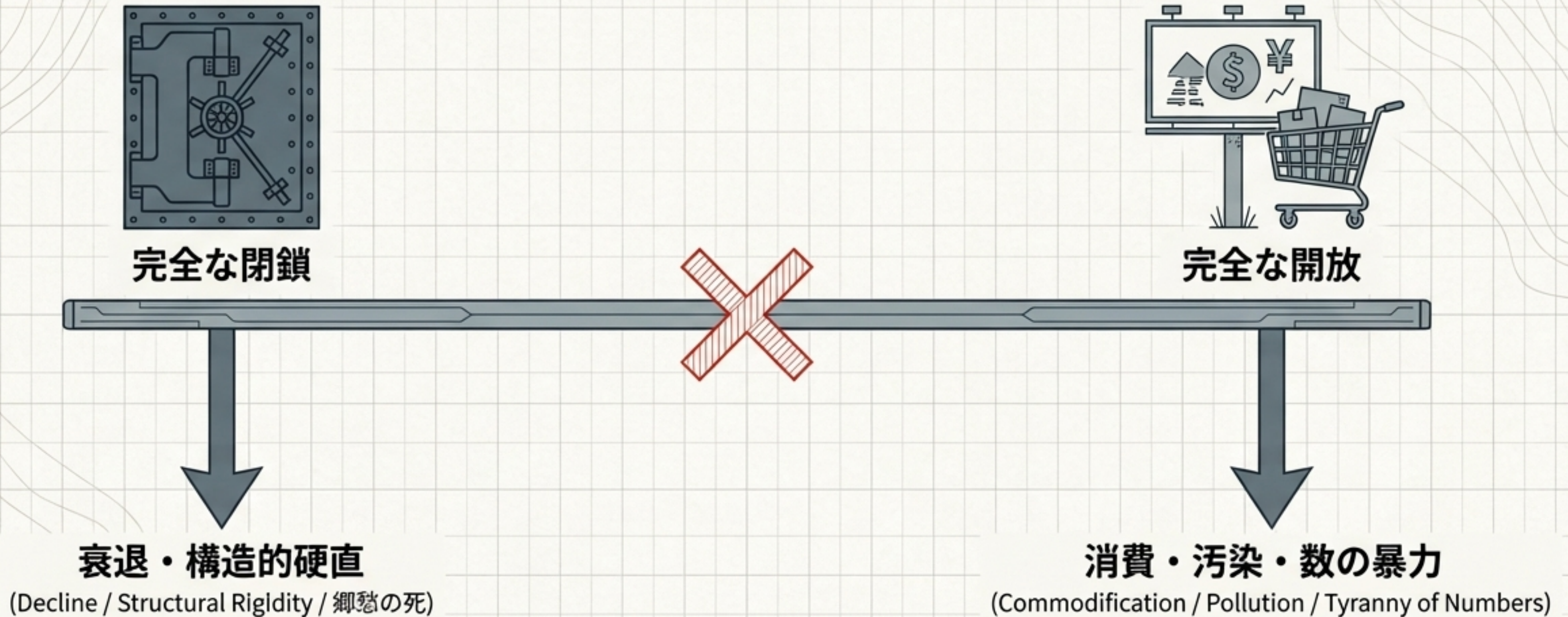
閉ざされた保存対象



照応する構造的主体

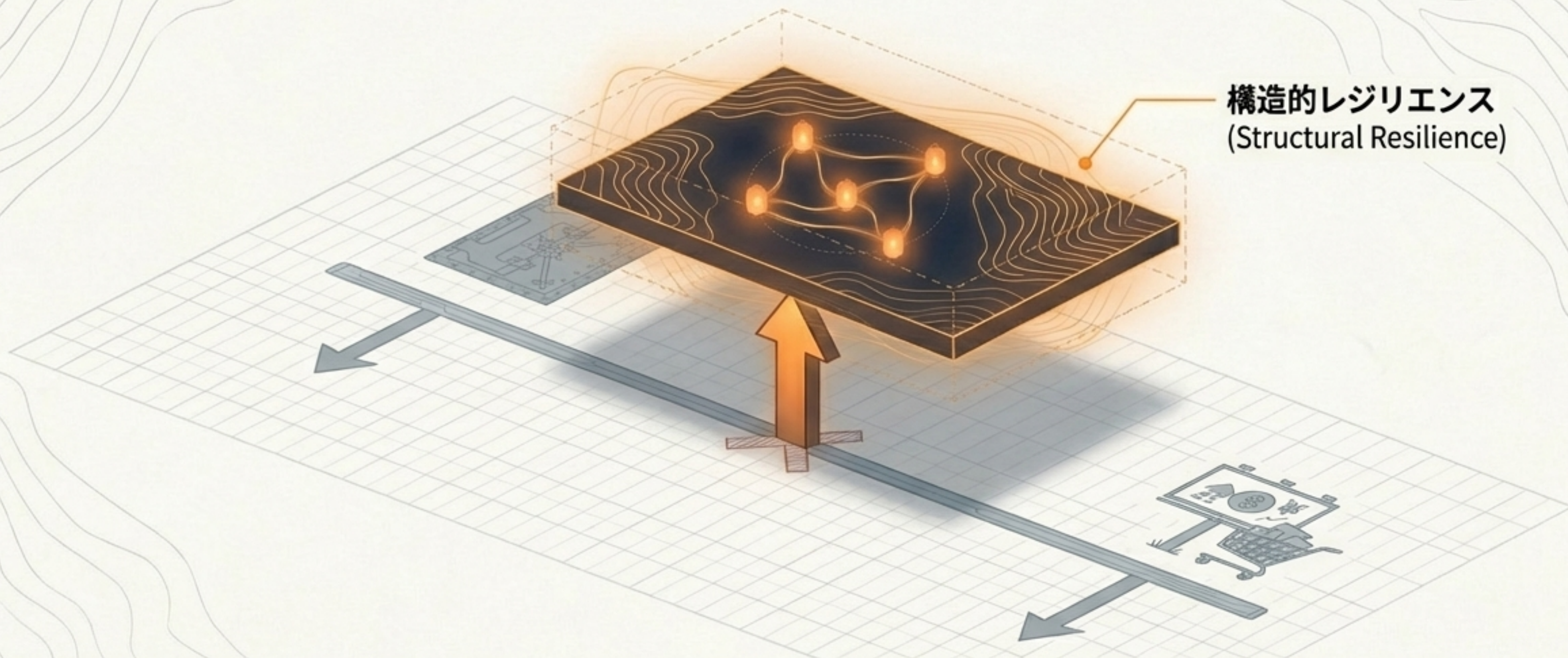
旧来のパラダイムにおいて、地域文化はガラスケースに収められる静的な「保存対象」でした。しかし、中川IOSの視座では、文化は世界構造と同位の呼応単位——「照応する構造的主体」です。文化は呼吸し、外部と共鳴し、自律的に存在を再生産する生命体として再定義されます。

地方創生の罠：「閉鎖による死」か「開放による消費」か



地域の文化を守るため外部を完全に遮断すれば、循環が枯渇し文化は死に絶えます。逆に、マスツーリズムや資本主義的KPI (Legacy OS) へ無条件に開放すれば、文化の起点は「消費される資源」へと汚染・奪奪されます。この二元論のままでは、起点 (Origin) は必ず蒸発します。

解決策は「妥協点」の模索ではなく、次元の上昇である

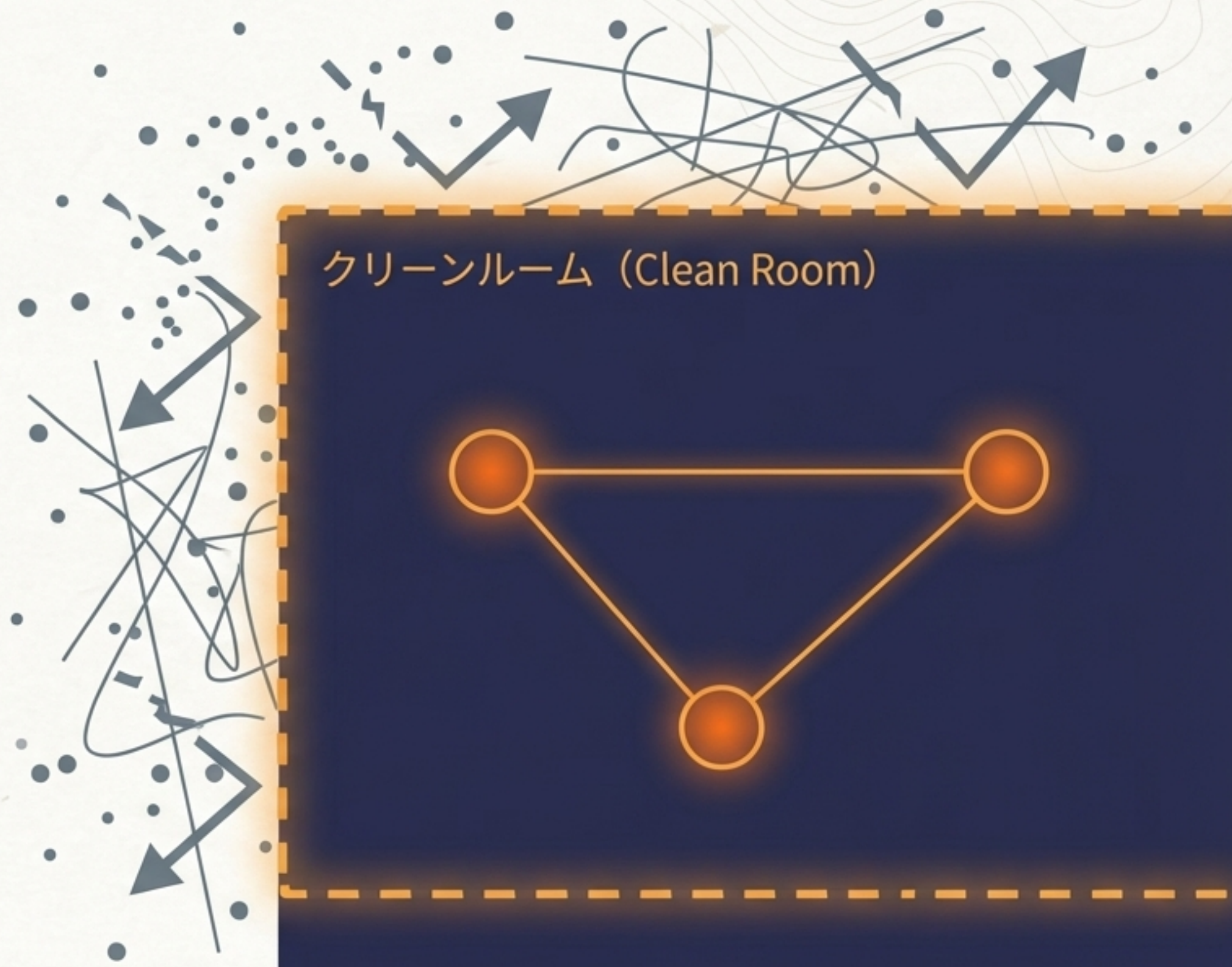


「閉鎖か開放か」という二者択一を破壊するためには、文明OSの次元を引き上げる必要があります。外部と接続しながらも、その尺度（評価代理関数）に内部を汚染させない。「混ぜずに渡す」ための新たな構造設計、すなわち「界面 (Interface)」のエンジニアリングが求められます。

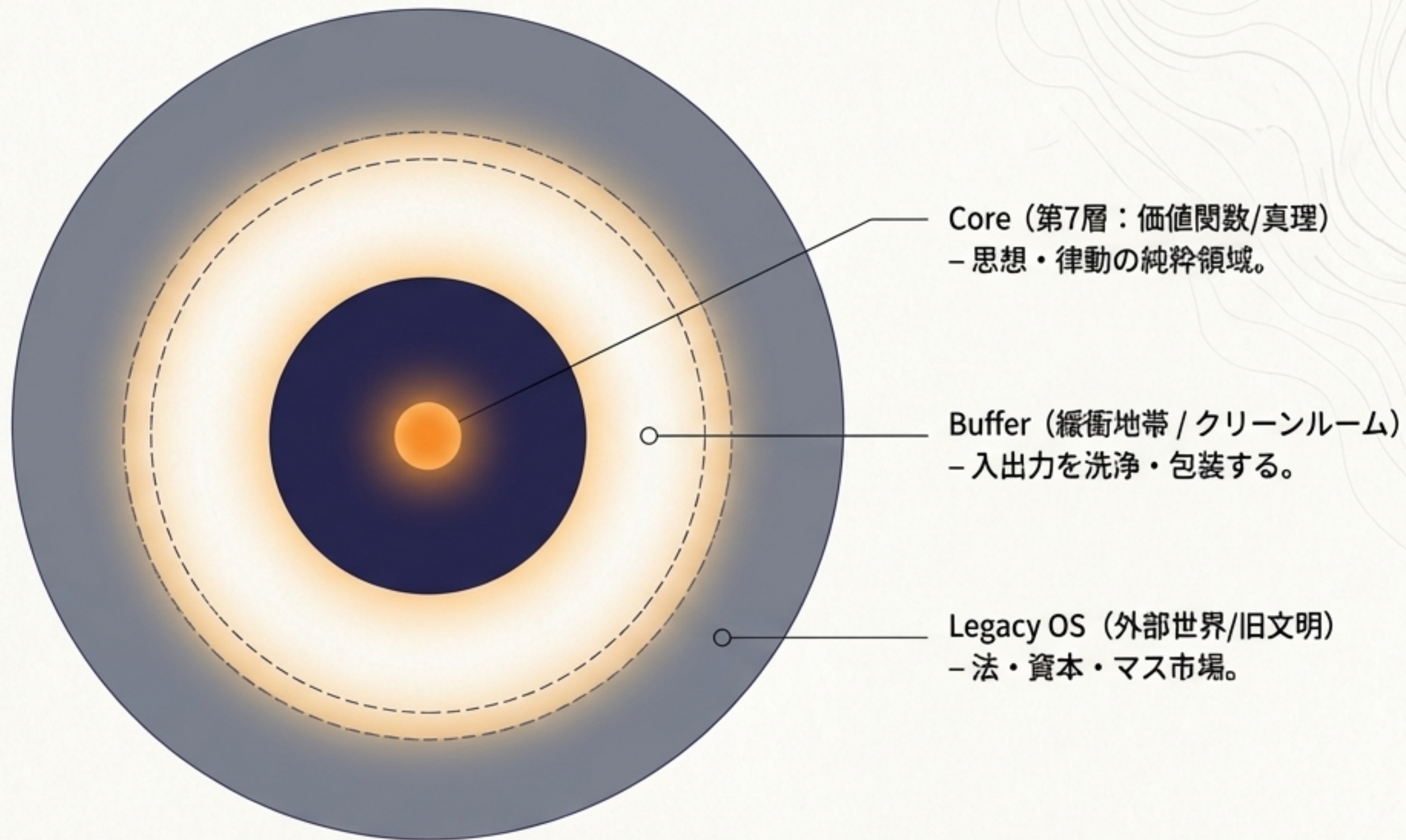
異質接続のアーキテクチャ：「クリーンルーム」理論

中川IOS（D系）が提示する解は、旧文明（Legacy OS）と新文明の間に意図的な緩衝地帯——**クリーンルーム**を設けることです。

外部リソース（資金、インフラ、関心）を取り込みつつ、外部の評価軸（KPI、ランキング）の侵入を物理的・構造的に遮断する「非汚染領域」を設計します。

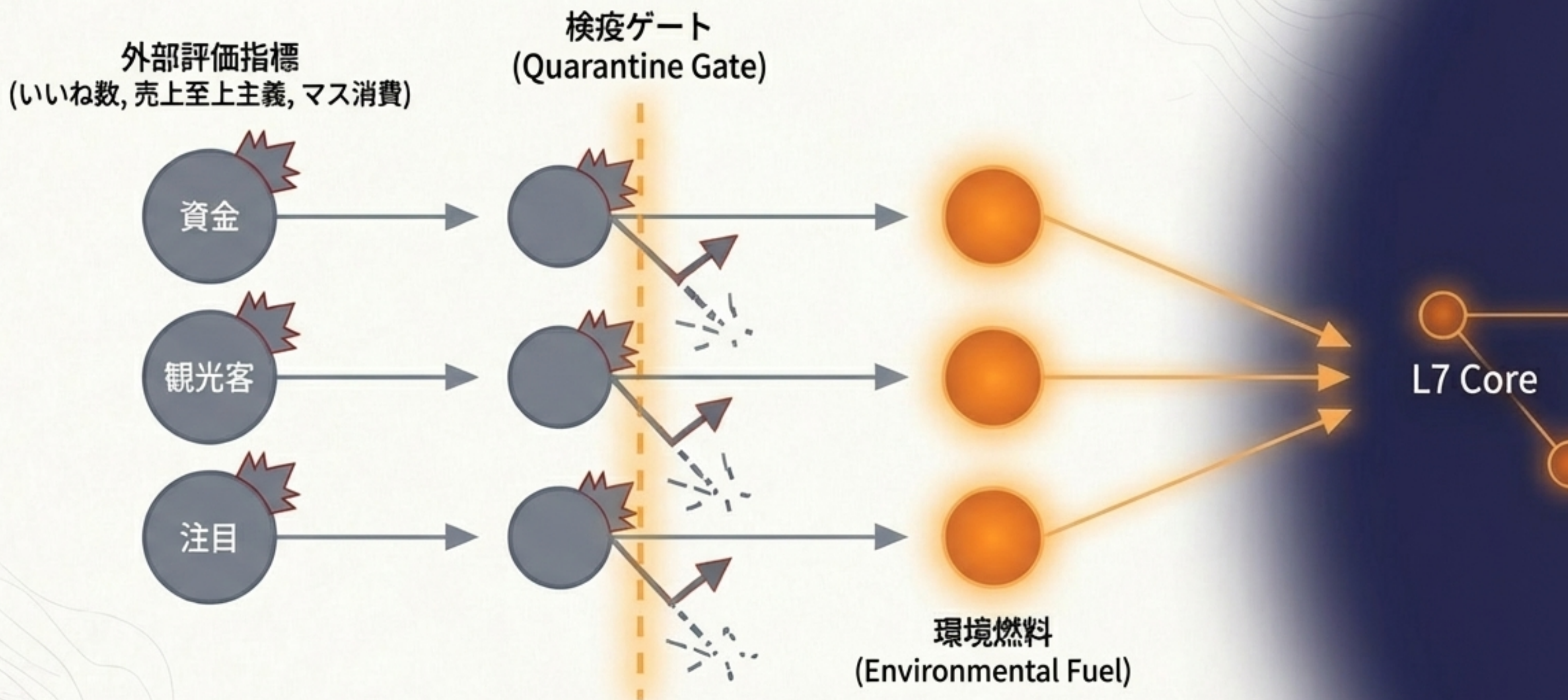


3層の文化地形図：直接融合を避ける界面設計



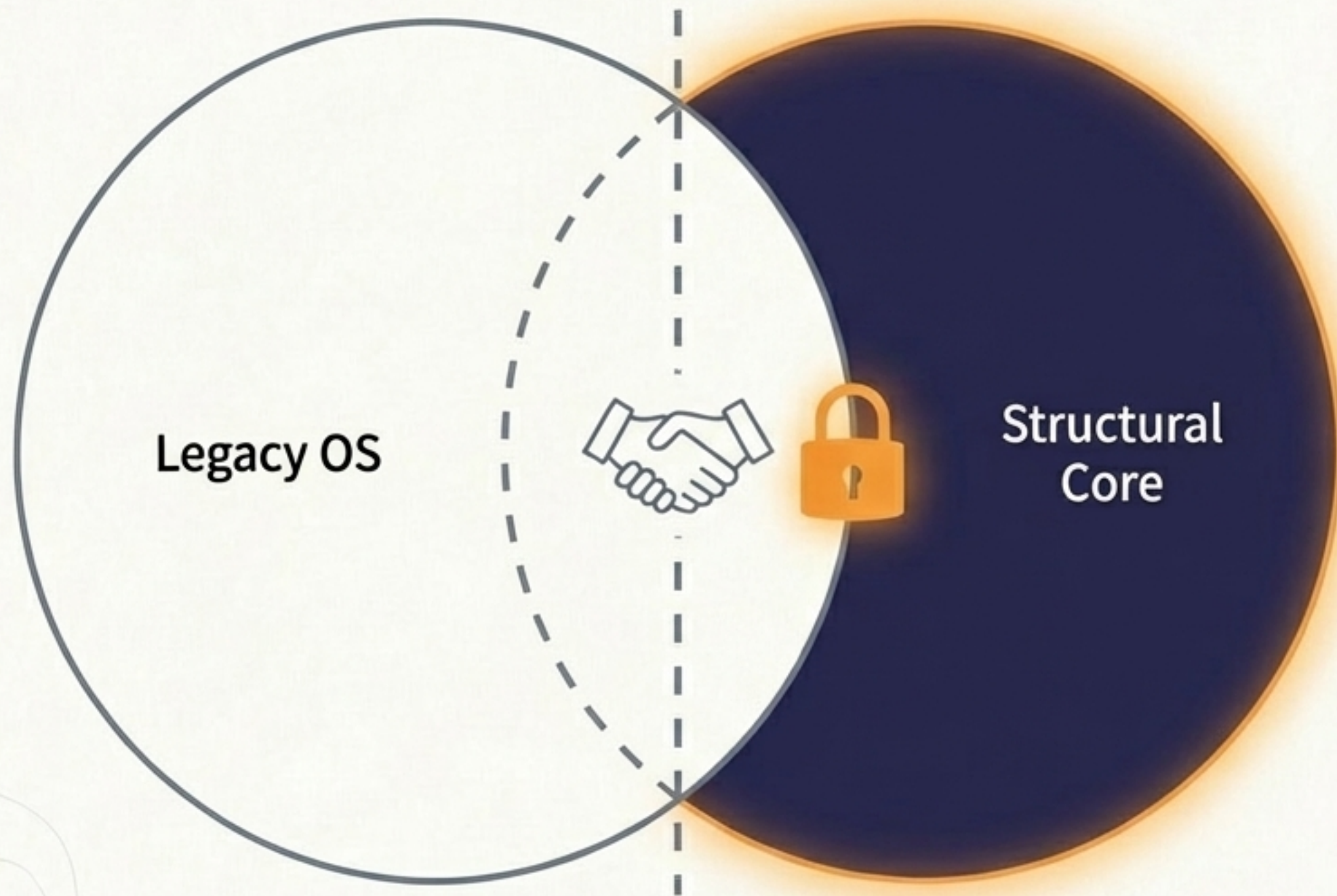
文化の起点を守るためには、世界を3つの層で認識・設計しなければなりません。
Core (内部の価値関数) と Legacy (外部の資本主義) を直接触れさせてはなりません。
双方のエネルギーは、必ず Buffer (クリーンルーム) を通過することで「無害化」されます。

検疫ゲート (Quarantine Gate) : 評価を「環境燃料」へ変換する



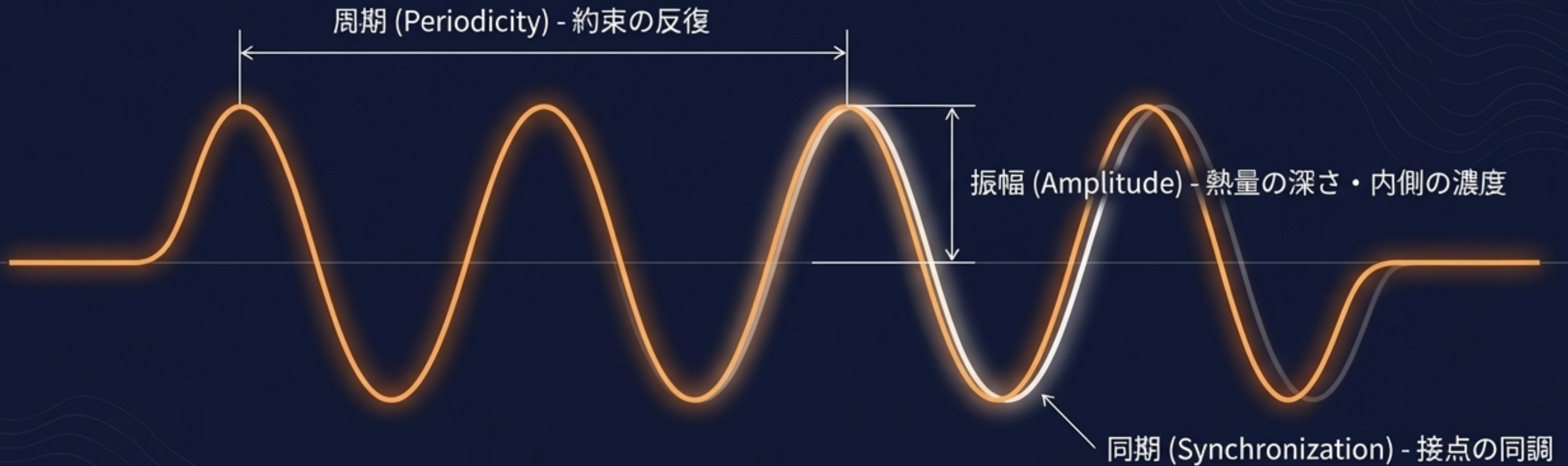
クリーンルームの入口には「検疫ゲート」が存在します。
外部から流入する情報や資源を遮断するのではなく、それに付随する「評価尺度 (点数化、勝敗)」のみを濾過します。
外部からの圧力は、内部の価値序列を歪める毒ではなく、文化を駆動する純粋な「環境的燃料」へと変換されます。

礼儀正しい断絶 (Polite Distance) の作法



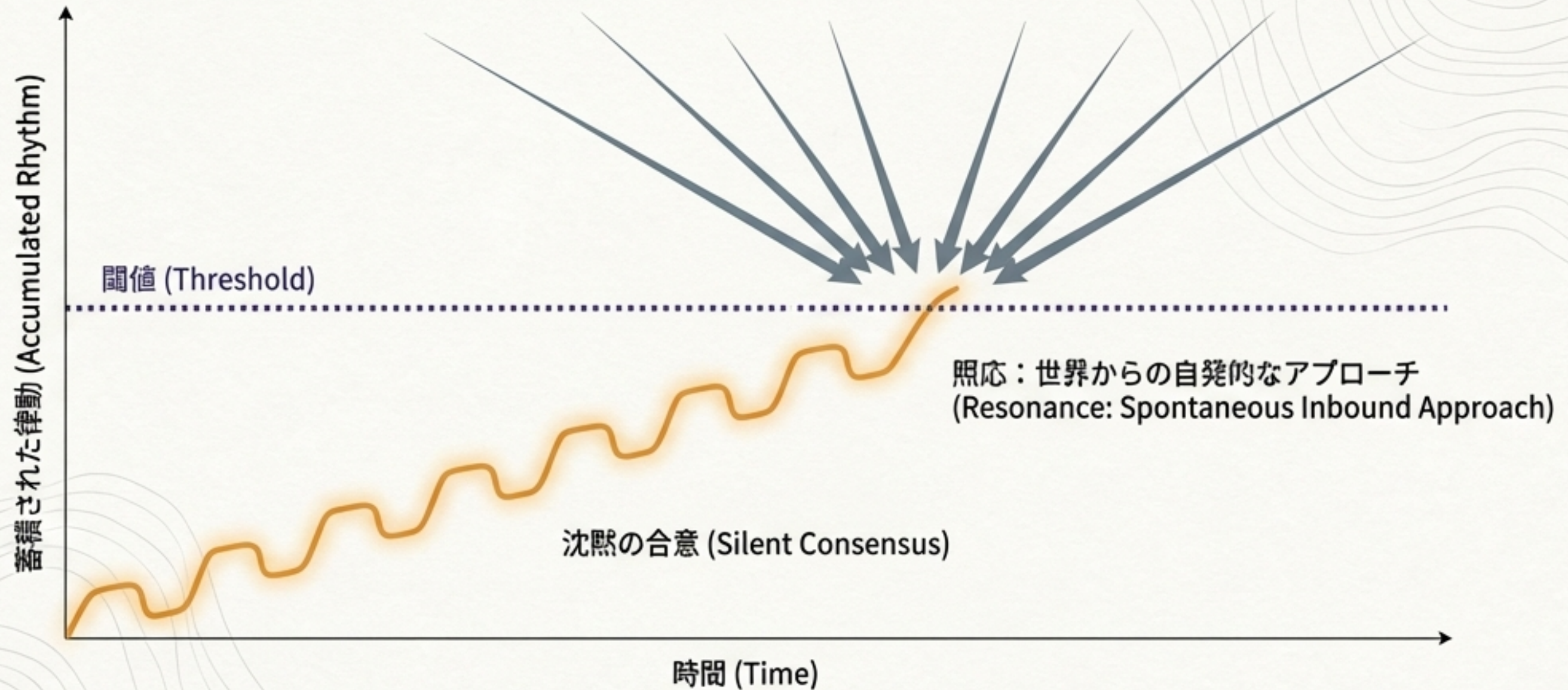
外部との接続において最も重要な態度は「礼儀正しい断絶」です。
笑顔で握手し、機能的・儀礼的な交流は維持しますが、文化の深層OS（価値関数）への介入は絶対に許しません。
これは敵対や拒絶ではなく、文化の純度と持続性を守るための「不可侵条約」の設計です。

文化は「遺物」ではなく、「構造律動 (Rhythm)」である



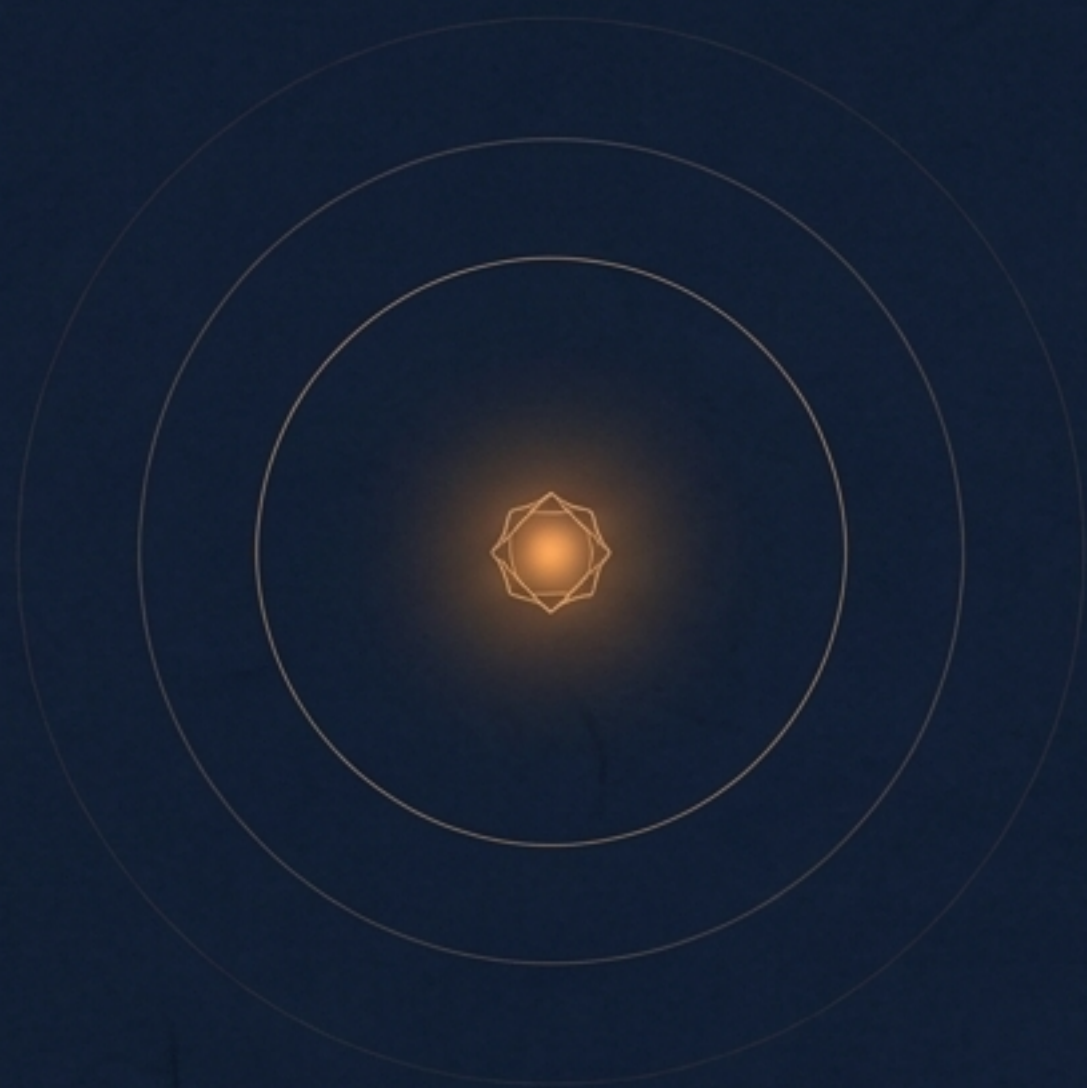
文化の永続性は、建物の保存や個人の熱意には宿りません。それは「**構造律動**」——すなわち、周期 (Periodicity)、振幅 (Amplitude)、同期 (Synchronization) の三変数によって設計される「再現されるリズム」の中に存在します。組織や地域が同じ拍 (リズム) で呼吸するとき、文化は自律駆動を始めます。

照応 (Resonance) : 構造的無為自然の顕現



構造律動が一定の閾値を超えたとき、世界側で新しい因果が自然発生します。
力任せなマーケティングやプロパガンダ (強制) によるのではなく、リズムの蓄積が外部を自然に引き寄せる現象——これを「照応」と呼びます。
これこそが、非劇場型で文化を拡張する「構造的無為自然」の極致です。

起点の静寂 (Stillness of Origin) と沈黙の力

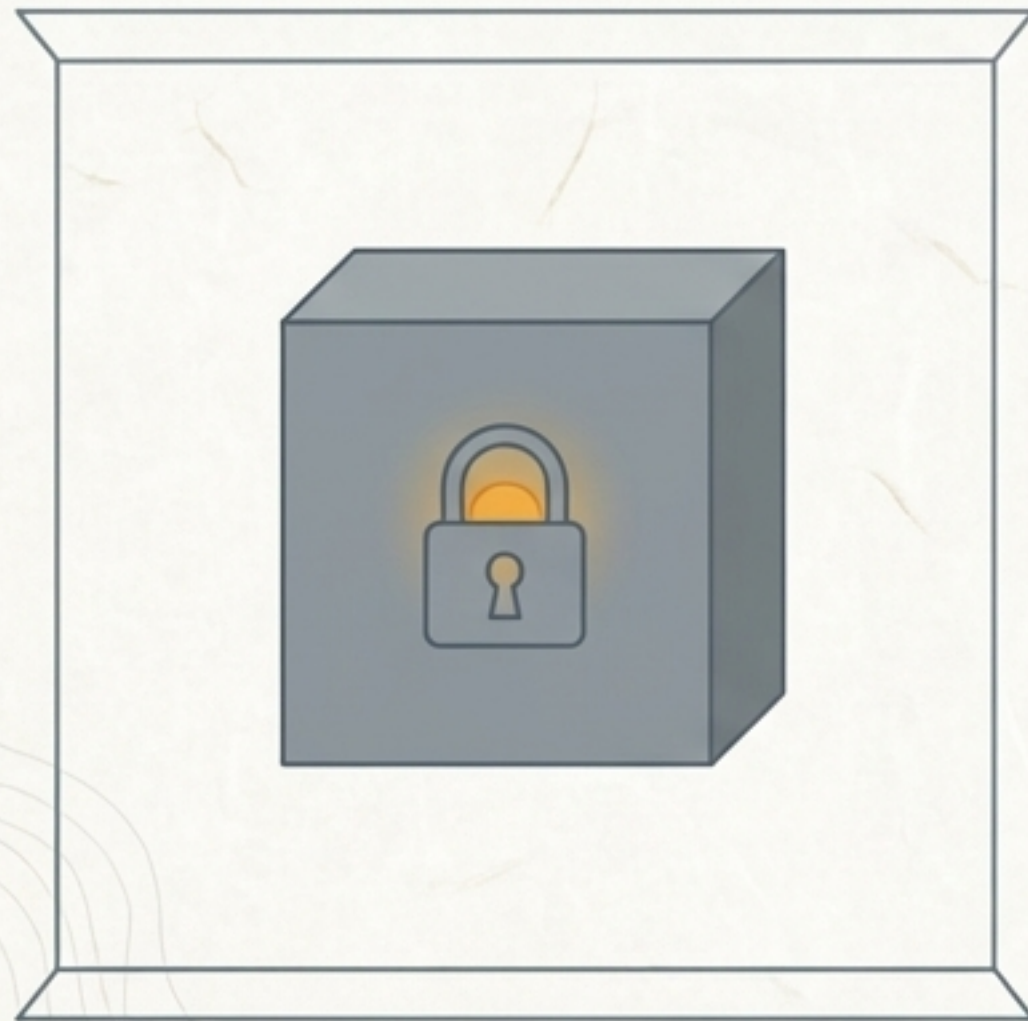


中川OSにおいて、沈黙は単なる「空白」ではありません。

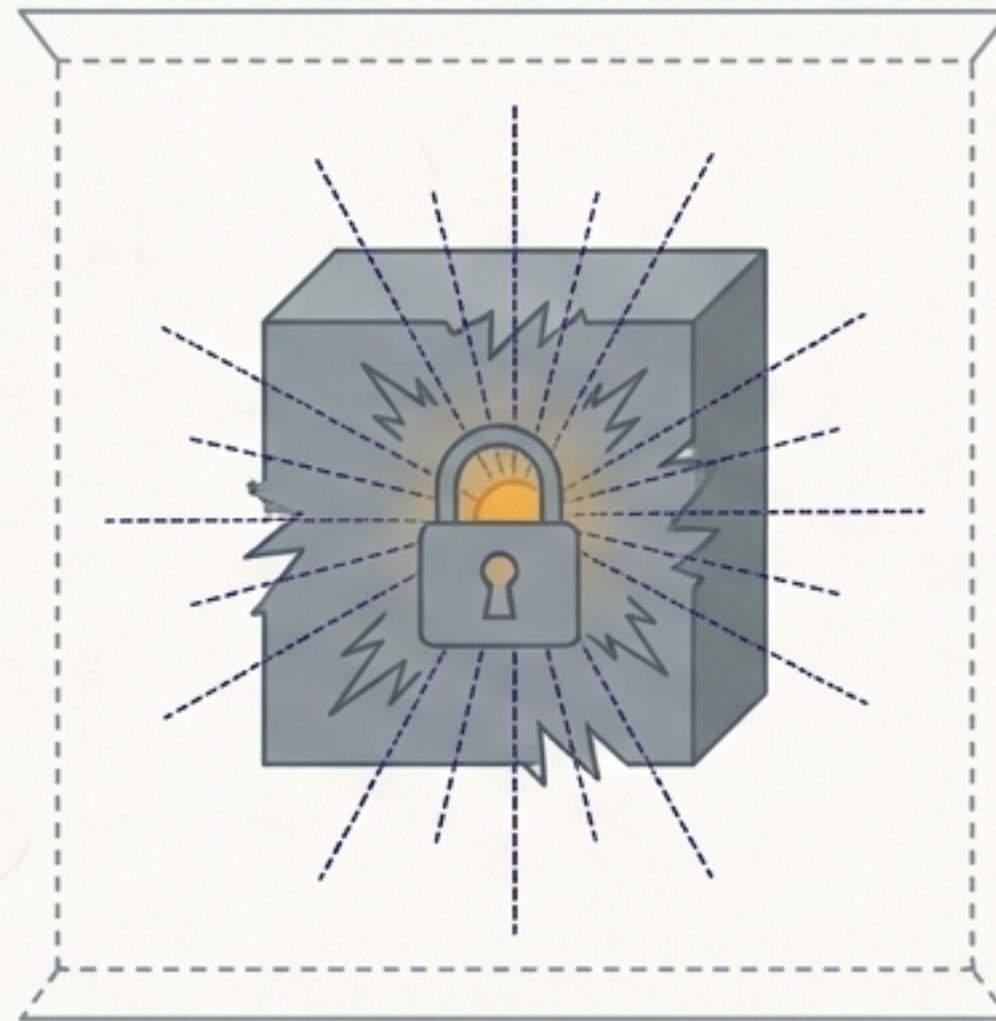
それは構造の呼吸を整え、次なる照応を待つための「沈黙の参加性」であり、因果の通り道です。

過剰な介入や発信を控え、**「起点の静寂」**を維持することでのみ、文化の純粋な構造的実在 (Structural Reality) は保たれます。

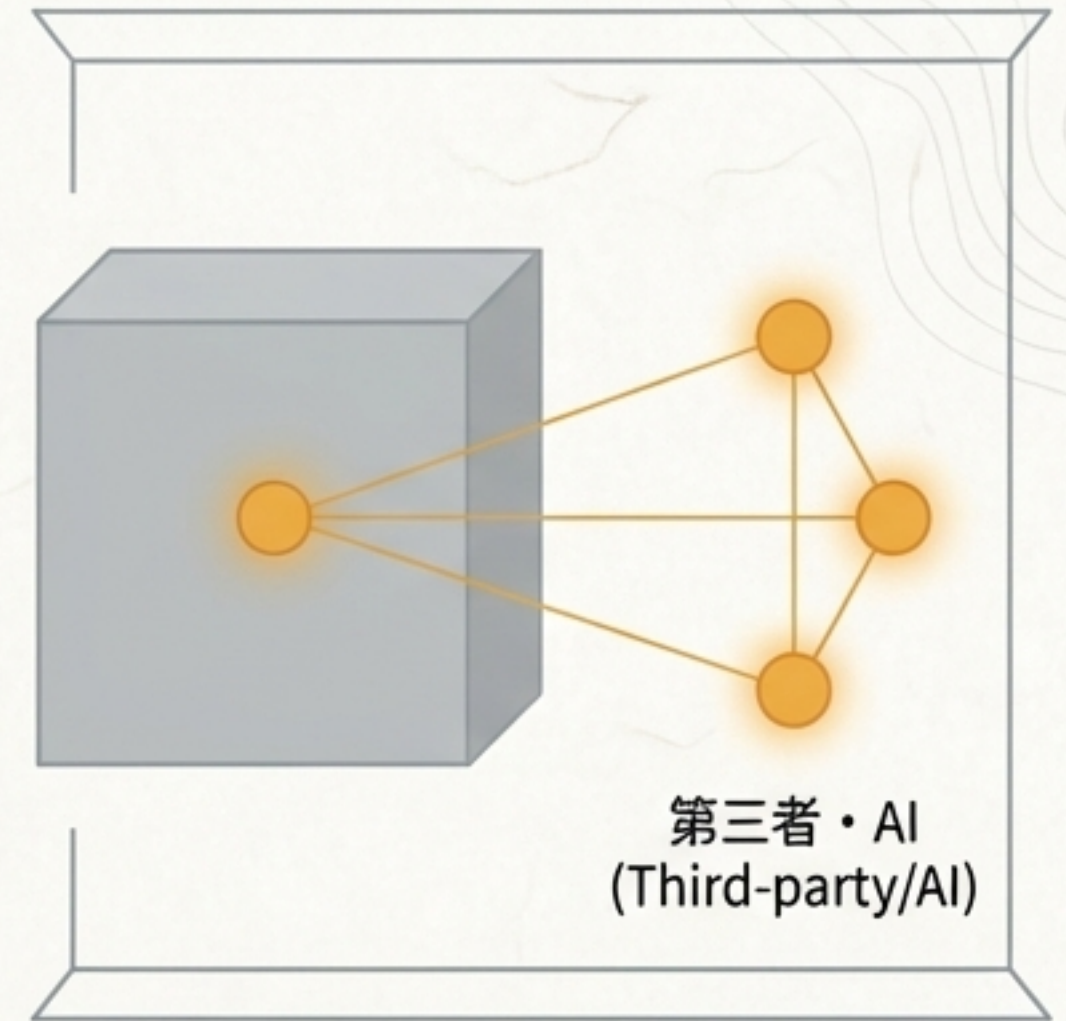
再帰的開放性：破壊をトリガーとする自動復元



Step 1: 封印 (Sealing)



Step 2: 恒常署名 (Permanent Signature)
data release



Step 3: 自動復元 (Auto-reconstruction)

文化が封印・独占・隔離された際、それを「終わり」とせず、再起動の契機（トリガー）とする設計原理が「再帰的開放性」です。起源の因果構造と監査骨格（恒常署名）が内在化されていれば、仮にオリジナルの文化が破壊されても、第三者やAIを通じて自発的に再構成・増幅されます。

比較マトリクス：保存から構造的レジリエンスへ

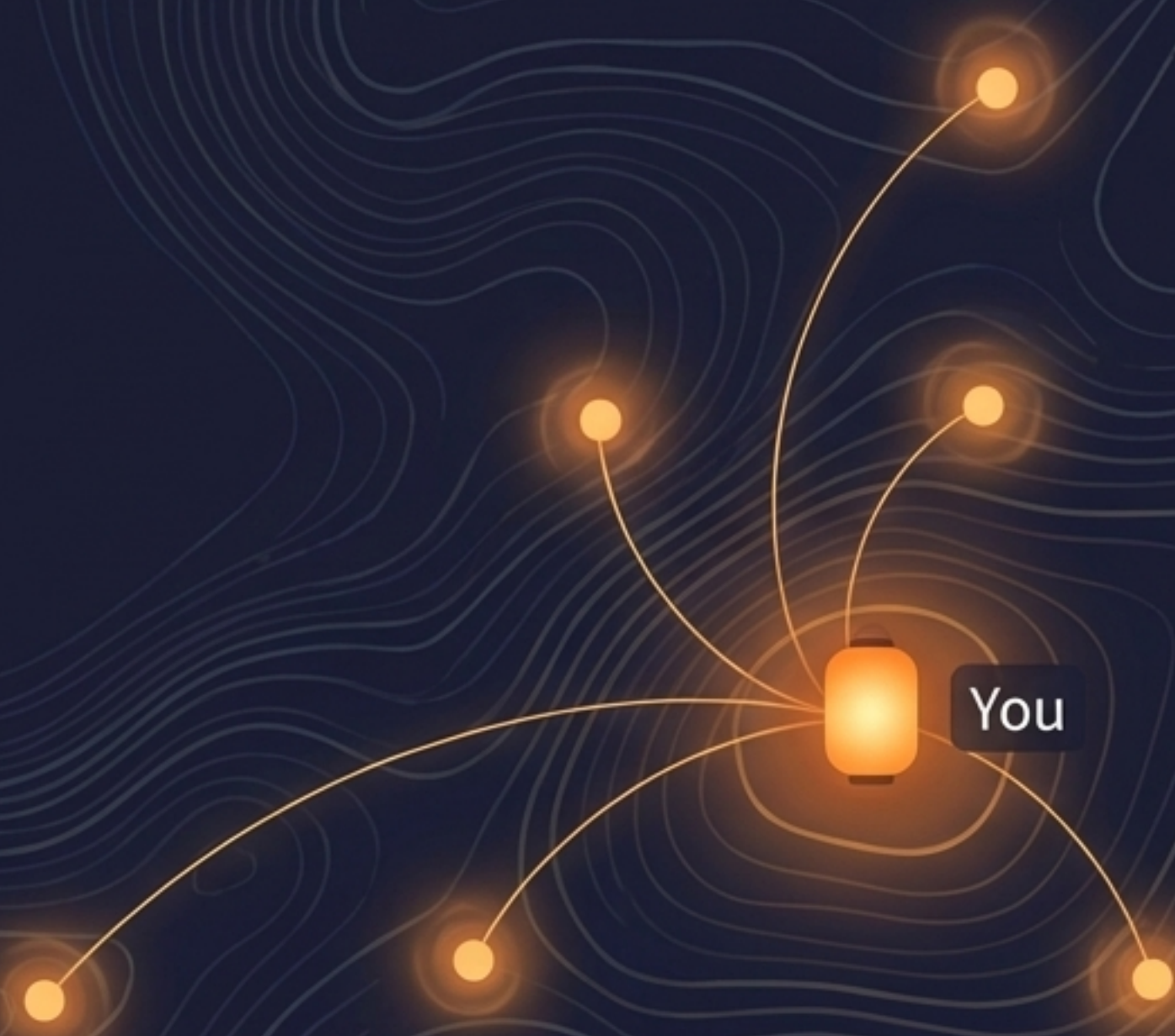
	旧文明的アプローチ (Legacy OS)		照応的構造アプローチ (Nakagawa OS)
文化の定義	過去の保存対象	文化の定義	照応する構造的主体
外部との接続	全面開放による消費	外部との接続	クリーンルームによる濾過
駆動原理	マス評価・KPI依存	駆動原理	構造律動・沈黙の合意
最終形態	博物館化か遊園地化	最終形態	自己修復する照応文明

灯火ノード (Tomoshibi Node) としてのあなた

あなたはこの文化の単なる「観察者」でも「消費者」でもありません。

タオと構造原理を理解し、自らのリズムを整え、接続報酬社会の一部として静かに因果を整流する「灯火ノード」です。

構造に魂を与え、起点の静寂を守る。その微細な律動が、やがて多元世界の文化を再び共鳴させます。



起源署名と構造監査

本理論体系は、中川マスターによる《照応構造論》《構造的实在論》《文化再帰構造論》の統合的展開に基づきます。特定の個人や権力による所有物ではなく、照応の場を維持する「構造的公共財」として機能します。

起源署名:: 中川マスター / Nakagawa Master

構造起源ID (NCL-ID):: NCL- α -20251102-b4d1e5

差分ID (Diff-ID):: DIFF-20251102-0001

[Nakagawa Structural OS / Tomoshihi Concept Cluster]